

## 二月六日パリ騒擾事件覚書

はじめに

ふつう「二月六日事件 Le 6 février」と呼ばれている一九三四年二月六日のパリ騒擾事件がフランス現代政治史において占める重要性について多くを語る必要があるまい。それは単にフランス人民戦線成立の重要契機となったとか、「ドレフュス事件以来忘れられていた激烈さで右翼と左翼が対決した」とか<sup>(1)</sup>といった点にあるばかりではない。ちょうど、両大戦間期のヨーロッパ史が経済的にはニューヨーク株式取引所の株価の崩落に始まる大恐慌の波及により二分されるように、両大戦間期のフランス政治史を二分するとすれば、二月六日事件をその分水嶺とすることに大方の同意が得られるであろう。もし議会政治を成り立たせる共通の基盤がそれ迄フランス社会に存在していたとするならば、死者十五名、

平瀬徹也

負傷者少くとも千数百人（デモ隊側は個人的に手当を受けたものが少くないと見られるだけに、正確な数字は不明）を出したこの一大騒擾事件はその基盤を激しくゆるがしたのであった。三〇年代のフランス政治史において「忠誠な野党」の観念が驚くほど少数の人びとしか捉えていないかに見える事実はより深い社会的背景の中で理解されるべきであることは当然だが、二月六日事件が一九四〇年の第三共和政廃止への道の重要な一里塚であったことはほぼ異論がないところであろう。

ところで今日では二月六日事件の背景として世界恐慌のフランスへの影響やドイツにおけるファシズム独裁の成立などさまざまの政治的経済的社会的要因を挙げることは常識となつて<sup>(2)</sup>いる。それは当然のことでもあろう。しかし、「僅か数週間後に怒り狂う暴徒の一群がフランス・デモクラシーのシンボルである下院への乱入をはかるなど一九三三年末にだれが予言したであろうか」

とのワースの一九三四年の記述を読むと、今日のわれわれの理解とことなり当時事件は一般にはむしろ青天の霹靂として驚きをもって迎えられたことがわかる。<sup>(3)</sup>そこに同時代人の理解の限界を見るのは容易であろう。しかし、そう片付けることによりわれわれは案外歴史家のおちいりやすい陥穽にはまり込んでいる可能性もある。必然性の立証に急なあまり同時代人の実感からかけ離れた歴史像を造りあげてはいないであろうか。少くとも、危機の一九三〇年代というヨーロッパ史全体から得られる知見、それも多分に第二次世界大戦を経験した後の知見を恣意的に、しかもやゝ時期尚早にフランス三十年代史に投影している可能性がある。ともあれ、同時代人の一見素朴とも見える理解にも十分注意を払う必要がある。

本稿はこれ迄わが国でとかく人民戦線成立史の一駒としてのみ扱われてきた——したがって左翼の側から見られることが多かった——二月六日事件を、右翼も含めた同時代人にどう受けとめられていたかを見てゆくことで見直したいとの願いから出発した。さいわいきわめて短期間ながらフランス滞在の機会を得たため、二月六日事件下院調査委員会の報告などの史料に不十分ながらも<sup>(4)</sup>たることができた。しかし、この事件の本格的究明のためには参加諸団体の性格の解明を初めとして未だ為さるべきことは少な<sup>(5)</sup>い。したがって本稿では事件そのものの展開を追うこと、これまでの研究の動向を紹介することの二点にひとまず焦点をしばらくを<sup>(5)</sup>を得なかつた。わが国ではこの事件を特にとり挙げた論文は管見の限りでは無い。

なお、紙幅の関係から左翼諸派の事件への対応などすでに旧稿で言及した諸事実は大部分省いてある。

### (一)

最初に、二月六日事件の発端となったスタヴィスキー疑獄事件について簡単にふれておく必要がある。

事件の主役セルジュ・アレクサンドル・スタヴィスキーは一八八六年、帝政ロシアのウクライナにユダヤ系齒科医の子として生まれた。<sup>(6)</sup>かれが少年のころ一家はパリに移住し帰化した。教育熱心な父親のおかげで有名校リセ・コンドルセに学んだかれは父親の期待に反して歡樂の巷に生きる人間となり、やがて小さな詐欺の常習者となった。かれが最後に手がけたバイヨンヌ市の公設質屋を舞台とする不良債券発行事件にはバイヨンヌ市長兼代議士ガラ(急進黨)も一枚加わっていたばかりでなく、当時のエリオ内閣の労相であったダリミエ——公設質屋は労働省の管轄である——がバイヨンヌ債券をすすめる推薦状を書いていた。(事件発覚時はシヨータン内閣の植民地相)不正債券は一億八千万フラン発行されたが、それらは主として保険会社に売られ、個人投資家はバイヨンヌ地区に少数の被害者を出したほかはほとんど損害をうけなかつた。事件が発覚し関係者の逮捕が始まったのが三三年十二月も下旬であり、公衆が知ったのは三四年一月に入ってからであった。<sup>(7)</sup>その時にはすでにスタヴィスキーはおそらく何者かの警告をうけて逃亡していた。かれは数年来一方で国家警察(Sur-

eté générale) に対する情報提供にも従事していた。つまり仲間を売っていたわけである。かれがいざという時に見返りの情報を警察から得たとしても驚くにあたらない<sup>(8)</sup>。

公衆が事件の報道に政官界の不正をかきとってわき立ったのは不思議ではない。この不正糾弾の先頭にアクシオン・フランセーズがあった。前記のダリミエの二通の推薦状が最初に公表されたのが、かれらの機関紙『ラクシオン・フランセーズ』一月三日号であったばかりでなく、スタヴィスキーが前年の総選挙で急進党に資金を提供したのではないかとの示唆まで添えられていた<sup>(9)</sup>。この暴露はセンセーションをひきおこし、他の新聞も一斉に事件にとびついた。『ラクシオン・フランセーズ』一月七日号はその後デモ隊の合言葉となった「盗人どもを倒せ」(A bas les voleurs)との大見出しの下に王党青年団(アクション・フランセーズの実働部隊)団長モリス・ピュジョーの「パリ民衆へ」の訴えを掲載し、初めて下院前での示威を呼びかけた。

翌一月八日、フランス・アルプスの保養地シャモニーの山荘で国家警察にふみこまれたスタヴィスキーがピストル自殺を謀り、意識不明で病院に収容された(翌九日早朝死亡)とのアヴァス通信社の九日付ニュースは驚きと疑惑の嵐を呼びおこした。

半官のアヴァス通信によっても刑事たちはピストルを手にして山荘に突入したとされただけに、スタヴィスキーの死は果して自殺だったのか、刑事たちが政府の意をうけて口封じのために射殺したのではないかとの疑惑は避けられなかった。ワースによれば「パリでは十人中九人は『公式』説明をひとことも信じなかつ

た<sup>(10)</sup>。野党紙は左右両翼とも一致して殺害説を採用した。真相は不明というほかないが、現在のところ自殺説が有力である<sup>(11)</sup>。

真相はともあれ、一月一日午後から始まったスタヴィスキー事件に関する下院討議は連夜にわたる街頭デモ——王党青年団員を中心とし時にフランス連帯団員や愛国青年団員などをも含む——で迎えられた<sup>(12)</sup>。夜ごと警備陣に厚く守られるブルボン宮(下院)の光景は右翼紙の絶好の宣伝材料であった。大通りの鉄製の手すりやベンチが破壊されて飛道具やバリケード材料として使用され、毎夜百人二百人の逮捕者がだが、右翼に甘いパリ警視総監ジャン・キアップにより翌日には釈放され、再び騒擾に加わる有様だった<sup>(13)</sup>。

十一日の下院討議が始まったとき、ショータン内閣の立場は未だそれほど危うくは見えなかった。二日前にようやくダリミエ植民地相が辞任し、スタヴィスキーから金銭を受取った何人かのジャーナリストも逮捕された。政府も関係者の責任追求に真剣に乗り出したかに見えた。

しかるに、ショータンは下院で、無責任なジャーナリズムによる個人的中傷を防止するため誹毀罪を強化する法案を提出して与党系の新聞からも非難された。フランスの新聞雑誌がしばしば個人攻撃にふけたことは事実で心ある人びとの眉をひそめさせていたとはいえ、スタヴィスキー事件が暴露されるに当ってジャーナリズムが果たした役割は否定できないところであったし、提案の時期として最悪であったからである。しかも翌一二日、右翼のイバルヌガレー議員が事件に関する下院調査委員会の設置を要求し

たのに対し、首相は、秘密保持の困難や活動が長期にわたりすぎるとか政治的空氣を毒するなどの理由でこれを拒否するという信じられない程のへまを演じた。イバルネガレーは野党代議士であるとはいえこの要求ほど当時緊急に必要とされたものはなかったからである。<sup>(14)</sup> さらにレーナルディ法相がかってあるいんちき会社——スタヴィスキーとは無関係だが——の取締役に名を連ねていた事実が右翼代議士アンリオにより暴露され、法相が首相に辞意を表明するに及んで、ついに一月二十七日ショータン内閣は不信任決議をまつことなく総辞職した。その夜の街頭行動をシャバルデスは「二月六日暴動の予行演習」と名づけているが、<sup>(15)</sup> 王党青年団員のみならず愛国青年団員、フランス連帯団員など計二千名の示威は、三百名以上が逮捕され警備陣から八十名の負傷者を出すほど激しいものであった。<sup>(16)</sup> 「暴徒」に対する住民の共感ぶりは、眼下の警官に窓から悪罵を浴びせるばかりでなくバケツの水まで浴びせる者が出るほどであった。警備陣の取締りの寛大さは、キオスク放火を傍観する警備陣に抗議した市民が逆に逮捕される有様だ<sup>(17)</sup> った。

後継首班を選ぶ立場にあるルブラン大統領は、ドゥーメルグ前大統領やジャンヌネー上院議長らに組閣を依頼して断られ、一月二九日、ショータンと同じ急進党のダラディエを首相候補に選んだ。この人選は一見妥当であった。なぜならダラディエは社会党の反抗のため前年十月に惜しまれながら首相の地位を去っており、前内閣の陸相ではあったがスタヴィスキー事件とも無関係であった。もし急進党から再び後継首班を選ぶのであれば、ダラデ

イエは最善の人選であったろう。しかし野党はもはや急進党首班を許す気はなかったように思われる。

ダラディエは組閣に当り、スタヴィスキー事件の迅速かつ断乎たる処理を約束したばかりでなく、清新強力で政党内必らずも拘束されぬ一種の超然内閣——挙国一致とまではゆかぬとしても——を考えていた。しかし、社会党右派のフロツサルやネオ・ソシアリストの領袖マルケに入閣を拒まれ——マルケは内相以外を受けようとしなかった——、結果は中央諸派からファブリ陸相とピエトリ蔵相を加えた（ファブリは直ちに所属党派から除名された）<sup>(18)</sup> だけのおよそ変り映えのしない急進党中心の内閣であった。これでは清新強力内閣どころか、僅かに存在した野党軟化の可能性もあまり期待できない代物であり、事件解明の中心となるべきプナンシエ法相に至ってはほとんど名を知られていない未知数の人物であった。それでも、自身は郷軍人であり当時は果断の人と見られていたダラディエ個人の威信はなお低くなく、組閣後しばらくパリの街頭では騒動はおろかデモ隊の姿すらほとんど見られな<sup>(19)</sup> かった。

しかるにダラディエはつづいて一連の高官人事を発表して反政府勢力の憤激を買った。まず、トメ国家警察長官と、ショータン前首相の義兄弟であったプレサル・セーヌ県検事局長が配置転換となったのはスタヴィスキー処遇の不幸から当然であった。しかしトメがコメディ・フランセーズ劇場の支配人に左遷されたのはいかにも場違いの観を与えた。（実際には作曲家の息子であったトメは文学芸術方面に造詣が深く外見ほど場違いではなかつ

たのだが<sup>(20)</sup>。しかも引退を命ぜられたエミール・ファールブル前支配人はこの時期シェクスピアの「反民主主義的」作品『コロオラス』を上演させて連夜右翼青年たちの喝采を浴びていただけに懲罰的人事と受けとられても止むを得なかつた<sup>(21)</sup>。さらに右翼に受けがよく政界に隠然たる勢力をもつと信じられたパリ警視総監キアップ<sup>(22)</sup>をモロッコ総督に移そうとして本人に拒否され解任したことは二月六日事件の直接の引金となった重要な措置であつた。

モロッコ総督職はかつて国民的英雄リヨテ元師もつとめたきわめて高い地位であり、この更迭は必ずしも左遷ではない。この決定に憤激した右翼保守派もダラディエがこの人事を昇進と考えた可能性は否定していない。たとえばアンリオは、「かれの立場にあれば多くの者がすすんで受諾したであろうこのモロッコ総督職」。「キアップが就任を拒んだ手紙を受けとって仰天したこの指導者たちよりも驚いた者はなかつたことは確かである」と記し、シェローも、「この粗忽者ダラディエはキアップ氏の受諾を疑っていないかつた。かれが待ちのぞんでいた昇進にすぎないとかれは信じていた」と書いている<sup>(23)</sup>。

だが、コルシカ人でパリ警視総監職に特別の愛着をもつキアップ、またダラディエの依頼に応じてこの二、三日、全国在郷軍人連盟UNC(厳密にはそのパリ地方支部)のデモを中止させるためルベック会長に自らの総監辞任をふりかざしてようやく延期を了承させていたキアップは昇進とは受けとらなかつた。とりわけパリで左翼デモが「キアップを牢獄に！」(疑獄に関りがあるの意)と叫んでいる時には受諾できないとキアップは主張した<sup>(24)</sup>。さ

らに悪いことに反政府側はダラディエのキアップ解任の真意を、下院で不可欠な社会党の支持を買うためと受けとめ憤激したのである<sup>(25)</sup>。キアップの行政官としての能力は左翼に好意的なワースも認めるほどこだけになおさらである<sup>(26)</sup>。

これに対してダラディエ自身が後日、下院調査委員会に与えた説明によると、キアップ解任の理由は社会党の支持票欲しさといつたことにあるのでは全くなく、二月二日夜かれが目を通した「スタヴィスキー事件における警視庁の行動」と題された首相あての行政監察報告——ふつう報告者の姓にちなんでモッセ報告と呼ばれる——にあつた。そこではスタヴィスキーとキアップの間に何ら疑わしい事実はなかつたとされたが、パリ警視庁の職務怠慢が指摘されていた<sup>(28)</sup>。しかし、調査委記録によると、二日午後一時四五分にすでに現モロッコ総督ポンソ氏の駐ベルギー大使就任のアグレマンを得るようクロードル駐ベルギー大使あての電報が発せられている事実がある<sup>(29)</sup>。

真相はともあれ、二月四日付朝刊で解任が報ぜられると中央派の二人の閣僚ピエトリとファブリがこれに反対して辞任し——前日の閣議はこの二人の留保つきで人事を了承していた——、事態は一気に六日の流血に向つて進んだ<sup>(30)</sup>。

## (二)

二月六日は新内閣が初めて下院と対面して信任の洗礼を受ける日であつたが、キアップ解任により社会党の票を確保したダラデ

イエが信任されることは確実であり、それがまた反政府派の怒りに油をそそいでいた。すでに前日には諸新聞や下院ロビーでは政府が戦車や機関銃やアフリカ兵を使ってデモを弾圧するだろうとの噂が流されていた。

六日午後三時、下院が開会し、ダラディエが壇上で演説を始めると、野党席（共産党を含む）はほとんど絶え間なく罵声、怒号を浴びせ、ボヌヴェーが一八九九年のワルデックルソー内閣以来というその喧噪ぶりは議長が続行不可能と判断して何度か議事停止を命じなければならぬほどであった。<sup>(31)</sup> 在郷軍人で右翼議員のグザヴィエールヴァラは散会後は街頭の在郷軍人のデモに参加すると公言して左翼席からの抗議の叫びを惹起した。議事停止中、議員たちは窓越しにコンコルド広場の大群衆の遠雷のような叫びを聞き戦慄がロビーを走ったとワースは伝える。<sup>(32)</sup>

すでにコンコルド広場では激闘が開始されていた。<sup>(33)</sup> 騎馬警官がサーベルをふるって群衆を追い散らそうとするのに対し、群衆からは石やアスファルト、花壇の鉄製手すりなどが手当たりしだいに投げつけられた。<sup>(34)</sup>（石やアスファルトをはがすためつるはしが用意されていた<sup>(34)</sup>）。オベリスクの左側でバスが火炎をあげて燃えていた。群衆の中にはステッキの先に剃刀の刃をつけて騎馬警官の馬を襲うものもいた。<sup>(35)</sup> 警官たちはコンコルド橋の中段まで退却した。ブルボン宮の地階は警備側の負傷者を収容する野戦病院に変じていた。記者室の入口には「示威者たちへ。ここには議員はいません」との張紙が出された。<sup>(36)</sup> ワースのようにこれをユーモアのみ解釈できるかどうか疑わしい。<sup>(36)</sup>

「筆舌につくし難い騒ぎ<sup>(37)</sup>」の中で八時半ごろ政府が三四三対二三七で信任され閉会が宣せられると、議員たちは先を争うように出口に急いだ。エリオは一度はアンバリッド附近のデモ隊につかまり、セーヌ河に投げこむと脅された。かれが危地を逃れたのはかれ——リヨン市長でもある——の「リヨン市長はローヌ河の水しか飲むことはできない」とのエスプリある抗議に殺気立った空気がやゝゆるんだところに、騒ぎを知らされた遊撃衛兵の一隊が近ずき救出したためといわれる。<sup>(38)</sup>

警備陣と「暴徒」側の衝突がもっとも激しかったのは言う迄もなくコンコルド広場であった。ここで発端まで時刻を朔らせる、午後四時ごろから右翼青年たちと見物を主目的とした群衆が集まり始めた。初めは警備側と「暴徒」とは親しげに話を交わし、群衆の笑いや拍手もしばしば聞かれた。<sup>(39)</sup>「四時半ごろには雰囲気は怒りというより陽気さが勝っていた」。やがて五時すぎには投石（石だけでなく、アスファルトや手すりなどを含む、以後も同様）が始まった。<sup>(40)</sup> 数台の警備車で阻止線を築いたコンコルド橋上を中心とする警備陣はこの頃全部を合計してもわずか二百名ほどにすぎず、その後何度か増援を得たものの負傷者もおびただしいためその員数はつねに不十分であり、この事実が「暴徒」側を一層大胆かつ攻撃的にしたと見られる。<sup>(41)</sup> 警備陣の受けた命令は橋頭より一步も退くことなく——退けば即ブルボン宮である——「暴徒」の渡橋を妨げることであった。警備側の負傷者数が増大するにつれ、かれらの反撃も一層手荒なものとなったことは理解できる。

七時ごろ最初の銃弾が暴徒側から発せられた<sup>(42)</sup>。七時半ごろ約千五百人のフランス連帯団のデモ隊（大部分は一八才〜二五才位の若者）が広場に到着し攻撃に加わった。追いつめられ「パニック」状態に陥った警備側は八時近くついにピストルで——空に向けて、時には暴徒に向けて——応戦した。驚いた指揮官たちはそれ以上の発砲を抑えようとしたが、すでに数名の死者が出ていた<sup>(43)</sup>。この時が第一のクライマックスであった。この直後、おそらく銃撃への腹いせから広場に面した海軍省の一階が数か所放火されたが、消防隊の非常な努力が暴徒側の投石や妨害にうちかかって鎮火に成功した。

第一のクライマックスが過ぎたあと、グランパレ付近に集合した全国在郷軍人連盟UNCパリ地方支部の自称三万人のデモ（調査委によれば発砲時二千ないし三千人、途中でふくれ上って一万人程度<sup>(44)</sup>）が八時半頃出発し、シャンゼリゼ大通りを下ってコンコルド広場に到着した。四日のデモ予定をキアアップの総監辞任の脅しで延期していたルベック会長は自らの譲歩が首相より無意味にされたことに特別の憤りを感じる理由があった。このデモは先頭に「フランスが秩序と清廉のうちに生きることを我々はのぞむ」と書かれた横断幕を掲げ、「ラ・マルセイエーズ」を歌いつつ整然と行進し、広場には突然静寂が帰ってきた。コンコルド橋前に達したデモの先頭は「下院へ！ 下院へ！」という野次馬の挑発を浴びながらも何事もなく方向転換し北へ向ってロワイヤル通りに入った<sup>(45)</sup>。ところが、デモは通りの途中で突然左折してエリゼ宮（大統領府）のあるフォーブール・サントノレ通りに入り警備陣

と激突した。このUNCの行動はその真意をめぐって下院調査委員会でもっとも論議が集中した点である。

ルベック会長は委員会での最初の証言では、ロワイヤル通りの北上を続けてマドレーヌ寺院に至りさらに右手のグランブールヴァールに向うつもりだったが、正面に騎馬警官の厚い列を見たため意見を変えフォーブール・サントノレ通りに左折したこと、逆に右折してサントノレ通りをとれば結局コンコルド広場に逆戻りするから不適當と考えた<sup>(46)</sup>と述べた。ところが、事件直後のUNCパリ地方支部の会員への訴えは「虐殺を中止させるため」デモ隊は左折してエリゼ宮に向った——つまり大統領請願が目的——と述べていた<sup>(47)</sup>。二月二日付の同支部機関紙に載った書記長の報告は、セーヌ河岸での解散という当初の予定が広場の実状から不可能と映ったので、三万人全員がエリゼ宮前でデモをするつもりであった——これも一種の請願行動であろう——と述べていた<sup>(48)</sup>。そして、両者との矛盾をつかれたルベックは意見を変え、デモ行進中に大統領請願を思いついたと主張した<sup>(49)</sup>。調査委員会は結局マドレーヌ寺院前の騎馬警官隊が事実上の阻止線となっていた——少くともそう人目に映った——事実と、大統領請願の目的とをデモ隊左折の理由として併記するにとどめている<sup>(50)</sup>。

真相はともあれ、エリゼ宮の警備陣は大統領府を死守せよとの命令を受けてフォーブール・サントノレ通りに二重三重の阻止線を築いていたため、UNCデモとの間に乱闘が惹起された。（ルベック自身も負傷）結局、エリゼ宮への道を妨げられたデモ隊は一度グランブールヴァールに向ったのち、さらに引返してコン

コルド広場で解散した。<sup>(51)</sup>

十時前後、広場ではUNCのデモの戻りが合体し、暴徒による攻撃の第二のそして長いクライマックスが始まった。再び暴徒側の投石や時おりの発砲、警備側の警棒による反撃、放水、騎馬警官による掃討などがくりかえされ、いつ果てるとも知れぬ対決に自制心を失った警備陣の「あらたなパニック」と、上官の制止をふり切つての発砲がつづいた。<sup>(52)</sup> 午前零時から二時の間に広場はようやく当局側に確保され、周辺の通りの騒ぎもしずまり、さしもの大騒擾も終つた。ワースは警備側の前後二回にわたる発砲——他に最後の掃討中にも広場の周辺部で発砲がくりかえされ、これは不必要だったとされている——がなかったならば、コンコルド橋上の阻止線は突破され、暴徒が下院に乱入していたことは確実である<sup>(53)</sup>と見ている。なお当夜の警備側死者一名をのぞく民間人十四名の死者を所属党派別に見ると、アクション・フランセーズ員四名、愛国青年団員二名、フランス連帯団員一名となつており、<sup>(54)</sup>見物人一名、通行者と思われる者二名を除けば十一名中七名が諸リーグ員となる。当夜の主役が諸リーグであったことを物語る数字といえる。

コンコルド広場の攻防が当夜の対決のすべてではなかった。ここでは別行動をとつたグループのうち重要なものに言及する。

まず、約三千人とみられる「火の十字団」のデモはセーヌ左岸ではブルボン宮の南のヴァレンヌ通りに、右岸ではプチパレ近くに集合した。左岸組はコンコルド広場とは反対の南方から下院めざして整然と行進したが、僅か四十名ほどの警備のバリケード

に阻まれると、警備指揮官の要請を容れて強行突破をはかることなく方向転換し、オルセー河岸で右岸組と合流して組織<sup>(55)</sup>としては騒動に加わることなく終つた。翌七日、団員に死者なしと告げられたラ・ロック団長は不満をあらわにして「確かなことか？よく調べよ」と言った<sup>(56)</sup>という。

第二は約二十名のパリ市会議員を先頭とする愛国青年団のデモである。この日午後三時ごろから市庁舎に集まり出した市会多数派保守派は、五時ごろから集会（全市会議員八〇名中約四五名出席）を開いて事実上の待機姿勢をとっていたが、午後六時四五分ごろ警備陣の発砲で死者が出たとの電話報告——この時刻では事実<sup>(57)</sup>に反する——に接したとして、暴力への抗議を理由に下院へのデモを決定した。自ら参加したのは約二〇名（市会議員でもあるテタンジェ愛国青年団長を含む）であった。かれらは同じ七時に同じ市庁舎前広場を集合場所としていた約一五〇〇名の愛国青年団のデモ——行進中民衆を加えて約三〇〇〇名にふくれた——の先頭に立って七時十五分ごろ出発しセーヌ左岸を下院に向かった。<sup>(58)</sup> 七時半ごろかれらはソルフェリーノ橋の袂で阻止線突破をはかったため短いが激しい乱闘のうちに阻止され、デモ隊の一部はコンコルド広場の暴徒に混入することとなる。しかし、市会議員のうちの四名はその肩にかけた飾帯の威力で無事に下院に到達し、下院散会まで待たされたのちダラディエと会見し総辞職を要求した。<sup>(59)</sup> なお、市会議員たちの行動は以上のようなようだったが、かれらの「陰謀」については後述する。

他方、シャンゼリゼのクレマンソーの立像附近に集合した共産



党系の在郷軍人共和同盟A R A Cの自称三千名のデモは「インターナショナル」を歌い「キアップを牢獄へ」と叫ぶことなどで独自性を主張したものの、ほゞU N Cのデモと同一コースをたどり、その一部は広場の群衆に混入して終わったようである。<sup>(60)</sup>「独自のデモをしようとの指導者たちの願望は立証されるにしても、当時の無秩序と混乱の中でA R A Cの活動家たちがほとんどすべての他のグループとまじり合ったことを目撃者たちは一致して述べている」とベルステンは結論している。<sup>(61)</sup>

なお、諸リーグのうちマルセル・ビュカールのフランシスム団だけは、調査委員会は参加団体表中に挙げているが、個人的参加は別として事件に参加せず、市民に参加を呼びかけもしなかった。<sup>(62)</sup>ビュカール自身当夜偵察のためコンコルド広場を訪れただけであった。真のファシストを自任するフランシスム団は他の極右派と同一視されることを嫌っていた。

基本的にはパリの事件であった二月六日事件では地方の騒動は重大なものではなかった。地方に多少とも詳しく言及しているのはルクレールしかないが、それによるとリヨン、ナント、ナンシー、リールなどで右翼青年たちのデモがあり、警察や左翼の対抗デモとの間に小衝突があった。しかし、三千名の右翼青年が一時間にわたり中心部の交通を止めたリヨンの場合を除いてその規模も激しさも大したものではなかった。<sup>(63)</sup>むしろ行動に出ないことで地方は間接的に意志表示したと見ることもできる。右翼のシェローが地方に懸命に同調と理解を呼びかけているのもかれの焦りを示すのであろう。<sup>(64)</sup>

二月六日のみに限った物質的損害はアンリオによれば次の通りであった。バス放火三、同投石一五、倒された並木四三、放火ないし破壊されたキオスク二〇、ベンチ二六〇、燈柱四五〇、発光緑石二五〇など。<sup>(65)</sup>翌朝、政府の影響下にあるラジオは「皆さん、ダラディエ氏の政府は昨日二つの勝利を——一つは下院で、一つは街頭で——おさめました」と放送して右翼を憤慨させた。<sup>(66)</sup>

### (三)

反政府勢力が敗北したか否かはさておき、死者十五名、負傷者一四三三名という大事件を惹起した内閣がたとえ議会の信任直後とはいえ安泰であるとは第三共和政の政治的風土においてはほとんど考えられないところである。しかし、総辞職となればこれまた街頭の暴力に屈したことになり危険な先例を造り出すことになる。ダラディエが何れとも決断を下しかねたのも理解できる。

すでに六日深夜、ダラディエはフロ内相、プナンシエ法相、ポヌフォワシブル警視総監、ドナールギーグ控訴院検事総長らと善後策を話し合った。内相は戒厳令布告、国家安全への陰謀に対する予審開始、諸リーグ指導者の即時予防検束（七日夜の騒動再発にそなえての）などの強硬対策を主張したが、検事総長が議会開会中は立法によってのみ戒厳令を布告できるのに議会が同意する可能性は乏しいこと、予審開始には材料が不足であること、拘引状を発する権限は予審判事のみが有することなどを指摘して反対し、首相法相もこれに味方した。<sup>(67)</sup>しかし、七日九時から正午の

間に内相の手で騒擾に参加したアクション・フランセーズ、フランス連帯団、愛国青年団などの一部幹部の予防検束は開始された。(火の十字団とUNCは騒擾には無関係だったとみなされた) だが、任意同行に近い形式であったため、大物のレオン・ドーデ、ピュジョー、モラスらはあるいは言を左右にして(ドーデ)、あるいは不在のため(ピュジョー)。モラスは輿者のためべルに(68)縛を免れた。この検束命令も正午近く撤回された。

七日午前をダラディエは閣僚や与党幹部との評定に費した。この時までに内相は弱気に変じていた。かれによれば総辞職に抵抗するにしても警察力のみにはもはや頼れないことは確実であった。数的にも不十分である上にかれらの士気低下は著しく、前夜の奮闘の再現は期待しうべくもなかったことは内相として受けた最新の報告から明らかと思われたからである。(部下たちが前夜のデモ動員力過少評価の失敗に懲りて今度は過大評価に傾いたことは否めない) これまでダラディエを支えてきた若手閣僚たち、コット空相、ミストレル商相、ギイラシャンブル海運相らもいまや総辞職を進言した。このころ新聞が前夜の死亡者数を『ル・ポピュレール』の二九名から『ラクシオン・フランセーズ』の五十名まで左右を問わず誇大に報道していたことも空気を(69)険悪にしていた。

午前十一時に首相と会見した野党代議士イバルヌガレーは今晚一万人の死者が出るだろうと首相を脅した。アンリオはこれがダラディエの俊巡に止めを刺したかのように記している。(70)与党の中で社会党のブルムだけが留任を要請したにすぎなかった。しか

し、ブルムとてもダラディエの留任の可能性をどれほど本心から信じていたかは疑わしい。この時のダラディエの心理状態をブルムは五月の社会党トゥールーズ大会で次のように回顧しているからである。「ダラディエはこの数日来かたがと一連の首尾一貫しない行動が世論を当惑させ逆上させたこと、かれが公衆に対しても議会に対しても全権威を失っていることを疑いもなく感じていた」。(71)

午後一時にはダラディエ内閣の総辞職が決定され公表された。この報道にパリは安堵のため息をついたといわれる。(72)夕刻、前大統領ガストン・ドゥーメルグが首相就任を受諾したと発表された。その夜パリの各所で警官不在を利用した略奪行為が荒れくるった。王党青年団員、愛国青年団員、共産党員などと警備陣の衝突も随所で見られた。当夜の死者四名が衝突の激しさを物語っている。

一方、ルブラン大統領の熱烈な出馬要請を容れて八日午前南仏からパリに到着したドゥーメルグはほとんど救世主のように迎えられたといっても過言ではない。かれに批判的なワースも「ドゥーメルグ氏ほど容易に公衆が受け容れる人物は事実上フランスにいなかった」ことを認めている。(73)在任中これほど親しまれた大統領も少なく、前例のないほどの党派的对立の後にかれほどの適任者はいないと考えられたのである。しかし、ドゥーメルグの首相就任が客観的には野党がこれまで要求して得られなかったコンサントラシオン(左翼与党勢力の分裂——穏和左翼と中央派による新たな与党の形成)の実現であったことは言うまでもない。

ドゥーメルグ自身は組閣にあたり挙国一致性を強調するため共産党をのぞきブルムやシュオー労働総同盟書記長にまで入閣を要請したとされる。<sup>(74)</sup> 両者とも入閣を拒んだとはいえ、右翼からネオ・ソシアリスト（マルケ労相）まで網羅した上に、五人の元首相やペタン元帥とドナン將軍という二人の軍人を閣僚として含む新チームがこの上ない強力内閣と映ったのは当然である。これまで政局の中心にあった急進党は二十閣僚のうち六名を占めるにすぎない。

政府は下院で四〇二対一二五、棄権六八という圧倒的多数で信任された。組織的反対は社共二党にすぎなかった。同様に政府は議会に財政全権を要求して認められた。また、それぞれスタヴィスキー事件と二月六日事件を調査する二委員会の設置が定められた。（前者はすでにダラディエ内閣がその設置を提案していた）。

しかし、両委員会の二月二四日の発足はその三日前の二二日、スタヴィスキー事件に関りがあつたとされたパリ控訴院判事アルベル・プランスがディジョン近くの鉄道線路上で轢死体で発見された事件により影が薄いものになっていた。

フランスは一九三一年までセーヌ県検事局の金融犯罪課長であり、一九二六年にスタヴィスキーが起こした欺欺事件の審理が一九回も延期された——その結果かれが新たな金融犯罪を重ねることができた——のはセーヌ県検事局の責任だ<sup>(75)</sup>。しかもかれは死の直前に控訴院長の依頼でスタヴィスキー事件についての報告書を作成中であつた。事件の報道直後のパリの興奮は想像に難くない。当初はこれが政治的殺人であることを人びとは疑わなかつ

た。政府が真犯人発見に通ずる情報の提供者に十万フランの賞金を出すと直ちに発表したところに政府の狼狽ぶりがうかがわれる。そしてショータンの義兄弟で県検事局におけるフランスの上司でもあつたプレサール前検事局長（およびショータンその人）に疑惑の目を向ける新聞が絶えなかつた。

この事件はさまざまな状況証拠から見てスタヴィスキーについての自らの職務怠慢を苦にしたフランスの、他殺を装った自殺、殺人の自作自演であつたことはほぼ疑いない。<sup>(76)</sup> ともあれ、僅か二か月前に首相をつとめていた人物が殺人の疑いをかけられ数週間というものすくなからぬ人びとがそれを信じたのは異常という他ない。

#### (四)

以上簡単ながら辿ってきたこの二月六日事件の性格をわれわれはどう理解すべきか、いったい「暴徒」たちは何を目ざしていたのかについては当時から、すなわち当事者や観察者の間ですでにおよそ三つの見解が表明されており、それらのうち二つは研究者にも引き継がれている。まず、右翼反政府勢力の側は事件を汚職や不正に憤った愛国的民衆の平和的な示威に対する当局の野蛮な弾圧だと声高に主張した。アンリオ、シェローらがこれに当る。

（さすがにこの見解の研究者はいない<sup>(77)</sup>）

逆に左翼は事件をファシストや王党派の反議会主義的陰謀、成功の寸前まで行つたクーデタの企てであるとした。当時の左翼政

治家の大半は事件をそう理解していたし、今日でもそうした見解をとる研究は少くない。もっとも早い例は二月六日夜窓外に「暴徒」の叫びを聞きながらのブルムの下院演説「反動の諸党は……今日クーデタを企てている。かれらがねらうのは議会解散ですらない。それは勤労人民が獲得し、その血であがない、自らの財産とし、最後の解放の保証ともしている公共的諸自由の乱暴な没収なのである」<sup>(78)</sup>である。また、議会調査委員会は全体の結論として二月六日、「共和政は危機にあったか」と自らに問い、「この質問に我々は明快に答える。然り」と述べている。<sup>(79)</sup>人権同盟の調査報告も、「厳密な意味での陰謀はなかったが、王党的ファシヨ的<sup>(80)</sup>反動的諸組織の間には協力があつた……。国家主義的市会議員たちと徒党的諸リーグの目ざした目的は単なる内閣の交代ではなく体制の変更であつた」<sup>(81)</sup>「二月六日事件は国民代表制に対する暴動であり、議会制に向けられたクーデタであつた。一月の示威の技術と決定的な日に用いられた示威の技術が示すことは、二月六日事件が自然発生的運動ではなく、計画的で計算された企てだつたということである」と結論している。<sup>(80)</sup>

研究者ではシャバルデスやルクレールがこの見解を代表する。前者は「煽動者たちの意図はまさに民主主義的国家を転覆し、多少ともイタリア・ファシズムに靈感をえた体制をもってこれに代えることであつた」と明快である。<sup>(81)</sup>しかし、最も詳細に論じているのはルクレールである。<sup>(82)</sup>かれはまず、刑法八六条以下による陰謀の定義——国家の権威に反対してまたは相互に敵対して武装するよう市民をそそのかす目的、立憲体制を変更ないし破壊する目

的、荒廃をもたらす目的、これらの目的のため二人以上の間で決定されたあらゆる計画、あらゆる決定を陰謀とする——を紹介し、「成果の欠如は、目ざされた目標と用いられた諸手段を忘れさせてはならない」との全く正当な指摘でまず釘をさす。<sup>(83)</sup>二月六日以前のいくつかの共同デモのための諸リーグ間の連絡協議の存在を指摘し——この点は警備側の証言に基いてだが大体認められている<sup>(84)</sup>——、二月六日夜のための同様の協議やそれがパリ市会を中心に単なるデモの組織化を越えた陰謀に変化した状況（後述）を諸リーグ幹部の証言などに基いて紹介する。結論として、「第一には立てるべき共通の指導者<sup>(85)</sup>の不在のため、ついで唯一人の指導者と利害を共にすることへの怖れからいかなるプログラムも決定されなかつた」ことを認めながらも、<sup>(85)</sup>反対派議員の追放や、おそらくはパリの革命的伝統にのつとつた市庁舎での新政権樹立宣言が市会では漠然とながら共通認識として存在したと判断し、最後の瞬間での思いがけない火の十字団の脱落が作戦の成功を阻んだとする。

これに対し当時からワースのように上のいずれの見解にも与せず、事件を街頭行動<sup>(86)</sup>の騒擾により急進党内閣の退陣をせまる企図が手薄な防備陣のため暴走したものとする見解があつた。研究者ではこの見解をとる者が多いがそれぞれの間にはかなりのニュアンスがある。もっとも極端なのはルネ・レモンで——かれのつむじ、曲りは今さらではないが——、「デモ組織者たちの意図は今日でもよくは分っていない」ことを認めながらも、「事件の展開はローマ進軍よりもブーランジェ騒動を思い出させる」。「二月六

日事件は一揆ではなく、暴動ですらない。単なる街頭示威であり、もしそれが悲劇的展開を遂げず、その後の事態がその真の射程と不釣合な重要性を翹って付与しなかったならば歴史はそれをすでに忘れ去っていただろうと断じている。<sup>(87)</sup> 政府（警察）過失説とでも呼ぶべきである。『フランス・ファシズム』の共著者プリュミエーヌとラジエラは、それが権力奪取でなかったから参加しなかったとのフランシスム団長ビュカールの主張を紹介しつつ、「二月六日事件は新しい現象ではなかった。それはファシスト一揆でもなければ不満な大衆の突然の憤りでもなく、君主制の遠い昔から首都の舗道を定期的に血で汚してきたブルジョワ反乱的伝統の最後の発現でしかなかったらう」とそのファシシヨ的性格を否定する。<sup>(88)</sup> 他方、いわば「小陰謀」ないし「小計画」の存在を認めながらもその意義を重大視しないのがベルステンやウェーバーである。ベルステンによれば「われわれの知識の現段階ではたがって承認さるべきは、二月六日事件は共和制反対の陰謀の結果ではなく、危機から生まれスキャンダルに憤った民衆の不満を政権に反対して誘導するためスタヴィスキエ事件とキアッパ解任を利用しようとする反体制派や反政府派の一致した意志である。」「本当は……挙国一致ないし専門家内閣といった手段で右翼を政権につれ戻すことが問題だった。」「もし四十年後の今日、二月六日事件の真の目的についてあやふやさが相変らず支配的であるとすれば、それはあやふやさが参加者たちの主要な特徴でもあったからである。……大部分の示威者のあやふやさ……。勝利の暁になすべきことについての諸リーグ指導者のあやふやさ、それが

ドゥーメルグ内閣へのかれらの意外な加担を説明する……」<sup>(89)</sup> 同じくウェーバーによれば「共和国を転覆する陰謀があったことをだれもが否定したときそれは正しかった。口舌は少くなかったし、計画すらあったが、それはいくつかのばらばらの計画で真の陰謀と呼ぶほどのものではなかった。」「入手可能なあらゆる証拠が示すところでは、そうしたクーデタはたしかに一部で考えられていたし、ある程度は準備がなされていたが、さまざまなりーグの間の共同行動の計画はなかったし、単独で権力を得ようとして剣に希望することができる単一のグループは存在しなかった。」<sup>(90)</sup> さて、以上の三つの見解の妥当性を検討しておこう。まず右翼の見解すなわち愛国者の平和的示威への当局の野蛮な弾圧であるとの主張は——かれらも「無秩序分子」の混入まで否定はしないが——これまで見てきたように真実から遠い。それは警備側のおびたしい負傷者数からも裏付けられる。ただ、部分的に警備側の行きすぎや不手際が随所にあったことは否定できない。<sup>(92)</sup> とりわけエリゼ宮近くでUNCのデモが受けた攻撃はかなり野蛮なものだった。<sup>(93)</sup> 警備陣はデモ隊が大統領府と内務省の占拠を目ざしている<sup>(94)</sup> と信じたのではなからうか。実際にはUNCの行動はすでに見たように、警備陣にマドレーヌへの行く手をふさがれたためか、大統領に請願するためであったのである。このあと憤激したUNCがコンコルド広場にとって返し騒擾の第二のクライマックスに貢献したのであるから、警備の不手際はかなりのものがあったといえよう。そこに保守派の主張の生まれる余地があった。しかし、それは事件全体から見れば部分的真理であらう。

これに対して事件をファシストや右翼の民主的共和政打倒の真剣な企てであったとする第二の見解はより綿密な検討に値する。

この論者たちがこぞって紹介する二月以前の保守派の数々の騒擾予告——そのうち二つだけを挙げれば実に一年前の一九三三年二月号の全国納税者連盟の機関紙『納税者の目覚め』は「我々はブルボン宮と称するこの泥棒の巢窟への収斂的行進を企てるだろうし、必要ならばこの無能力者の院を掃除するため鞭や棒をふり上げるだろう。」と述べ、やはりスタヴィスキー事件発覚以前の同年十一月号の『週刊評論』の一論文は「事はきわめて簡単かつ迅速におこなわれよう。納税者が失業者のデモのち下院は無期限停会となりパリは戒厳令ないしそれに類するもの下におかれる。……たぶん首謀者たちが必要だろう。だが、もしこのチームが数週間以内に準備完了していなければならぬなら、未だ名前は挙げない方がよい。……かかるチームが出来つつあることをわたしは諸君に確言することができると語っていた——は単なる口舌としてこれ以上とり挙げないが、具体的な計画、陰謀の存在があれば見ておかねばならない。じじつ、二、三の陰謀が存在し、その一つは王政復活のそれであった！

ウェーバーが詳しく紹介するところでは、三四年一月初め、モラス、ピュジョーらアクシオン・フランセーズ幹部はブリュッセルにオルレアン家当主で王位継承権者のギーズ公とその嫡子パリ伯を訪ね会談した。スタヴィスキー事件に対する王党青年団のデモが開始されたのはその直後からだった。だが、ウェーバーはモラスらがパリ伯の陰謀計画に対して自らの無為と非協力を対置す

るわけにはゆかない羽目に陥ったこと、パリ伯の陰謀は諸リーグの実状と真意——アクシオン・フランセーズ以外に王政支持派は存在しない——を全く無視した空想的なもの（モラスらでも真剣にとり挙げる気に最初はなれなかったもの）であったと指摘している。(95) 同じくウェーバーによれば二月六日の諸リーグのばらばらの集合計画は王党派の主導権への諸リーグの警戒心に由来し、アクシオン・フランセーズ幹部もそれを十分に察知していた。また、王党派には六日正午ごろすなわち警備陣の出動以前に下院に突入する計画すら存在したが、他の諸団体が協力を拒んだため計画は放棄された。(96)

王党派の策動よりもはるかに重要な陰謀はパリ市会に関するそれである。セーヌ左岸をたどったかれらの独自のデモについては既述した。問題は首尾よく下院に到達した場合れらが何を予定であったかである。下院調査委員会においてテタンジェ、ラ・ロック、ジャン・ルノー（フランス連帯団団長）ら代表的な諸リーグ指導者はこぞって政府の交代が示威の目的だったと証言したが、これは自らの失敗を糊塗するため、また法的追求を逃れるためとも当然考えられ顔面通りには受けとれない。一方、人権同盟の調査が最初に発見紹介して以来知られるようになった六日夜の市会議員たちを先頭とするデモでばらまかれたピラがある。(98) 文面は「失格、失格。市庁舎前グレーヴ広場に集まった群衆は次の動議を歓呼して迎えた。『議会と世論の完全な背反を認めるパリ民衆は混乱の増大とわが代表たちの無力さに直面して議会の失格を宣言する。パリ民衆は可能な限り迅速に下院解散を実現するた

め共和国大統領に訴える。国家の建直しを実現する臨時政府がぜひとも必要である。平穩が回復すれば新たな選挙の実施が可能となろう。それまでは善良な全市民は警戒を怠ってはならない。秘密結社の専制に対しては蜂起はもつとも神聖な義務である。公安委員会」というものだが、人権同盟機関紙に再現された現物では「蜂起」の文字が一際大きく印刷され、文章そのもの以上に強い印象を与える。文章自体もけっして穩かな調子ではない。また同じ市庁舎に発するものとして二月五日付の一五名の市会議員の次の訴えも注目された。「パリ市民諸君。諸君の代表は三色旗と共和政が市庁舎で誕生したことを忘れない。事態は重大である。フランスは注意深く首都の声に耳を傾けている。パリはその声を平穩と威嚴のうちに力強く表明するだろう。パリ万歳！ 共和政万歳！ フランス万歳！ 署名」

第二に、市庁舎の陰謀の証拠として委員会でも重視されたのは、ダラディエ内閣の前閣僚ロルジュレの三四年六月六日付の委員長あての書簡であった。かれが二月八日レストランで友人と会食中右翼代議士ド・タストが近づき、「君は辞職してよかった。もし昨日そうしなかったら——今だから言えるが——臨時政府が夜には市庁舎で樹立されていたろう。」と語ったというものである。<sup>(100)</sup>

第三に重視されたのは市会議員ではないが会計検査官でこの時市庁舎を出発したデモの第四列にテタンジェと並んで参加していたデュムーラン・ド・ラバルテート（のちヴィシー時代に活躍）の三四年四月一日付の委員長あての次の書簡である。「われわれの目的は武器なしに群集の圧力の効果だけでブルボン宮に

侵入し、そこで必要な區別立てののちに（私は前下院で六一〇名の議員中三七〇名を見分けられた）普通選挙でえらばれた選良たちに手強い返報（手強いが血生臭くはない）を加えることだった。この普通選挙こそがフランスを戦争と破滅にみちびくものである。<sup>(101)</sup>

さて、我々は以上に見てきた市庁舎の「陰謀」を真剣な体制打倒の企てであったと評価すべきであろうか。市庁舎に政府打倒の計画が存在したことは疑いもない。そして一部にデュムーラン・ド・ラバルテートと同様の目的——それは明確な体制変更をともなっただろう——を抱いている者が少くなかったことは明らかである。しかし、六日夜のピラはその強い言葉づかいにもかかわらず、具体的手段としては大統領への下院解散の訴えが中心となっている。ロルジュレの一見ショックな証言もそれを裏書きしている。そこでは臨時政府の樹立はダラディエ内閣の居坐りが暗黙の条件とされており、下院解散すらもはや要求されていない。リーダーたちは激しい言葉ほどには自らの行動に自信を有しなかったことがうかがわれる。じじつ下院到達に成功した四人の市会議員は議事終了まで待たされた（ノ）挙句、総辞職を要求したものの、一緒に負傷者を見舞おうとの首相の誘いに応じてうやむやのうちに会見を終えた。群衆を背後に従えていなかったことがこの弱気の一因であることは疑いないが、広場の攻防の帰趨はまったく未知数だった時刻なのである。

このようにもつとも具体的な計画を有した市会議員多数派の場合でも実行への断乎たる意志が不足していたことは否めない。す

べて他人依存——大統領、群衆、下院内の同志等々——の印象が強いのである。下院占拠の確固たる意志があれば二月六日正午ごろ下院に突入しようとの王党派の計画に他のグループも賛同したであろうし、王党派も他の賛同がなくとも単独で実行した筈である。七十歳の老人ドゥーメルグが時の氏神となったのも不思議ではなく、弱体な第三共和政といえどもこの攻撃に耐えられたのは偶然とはいえない。<sup>(102)</sup>

### おわりに

最後に二月六日事件が示唆するものにふれておきたい。プリュミエーヌとラジエラはフランス・ファシズムに関する彼らの先駆的著作で、まさに二月六日事件以後火の十字団を唯一の例外として諸リーグの衰退が始まる事実に着目して、「二月六日事件のもっとも直接の結果は挙国一致政府の政権復帰であり、ひとたびその義務を果して不用となった諸リーグの孤立である。」<sup>(103)</sup>「諸リーグは伝統右翼から離れて真の政治的存在を維持できなかった」と記している。<sup>(104)</sup>たしかにドゥーメルグ内閣の成立以後、火の十字団をのぞく諸リーグが次第に勢力を失ってゆくのは事実である。そして火の十字団自身も勢力こそ拡大するにせよ、すでに二月六日夜の行動にその本質が露呈していたように院内保守派と根本的に対立するものではなく、その後もそのファシシ<sup>(104)</sup>的性格を薄めていった事実を考えると、諸リーグないし街頭右翼と議会保守派を対立的にとらえることが正しくないことが納得される。むしろ街

頭右翼と議会保守派は両大戦間のフランスにおいては相互補充の関係にあったと見るのが妥当ではなからうか。じじつ諸リーグの新たな誕生を見たり、その活動の活発化が見られるのは一九二四年、三二年など総選挙での左翼の勝利の後であることが注目される。保守派は自らの議会での劣勢を院外活動で補おうとした。したがって保守派が自ら政権に復帰した時、役割を果たした街頭右翼は衰勢を免れなかった。むしろ他の諸国においても両者を対立の側面でのみ捉えることは正しくないであろうが、フランスではとりわけ両者の相互依存面が著しい。この特質はレモンを代表とする従来の研究のように諸リーグ（ないしその大部分）の体制内的性格を一方的に強調することで説明されるのではなく、それ以上に、二月六日事件にも明らかに看取されるように、議会制民主主義へのフランス保守派の帰依度の低さによっても説明されるべきであろう。（一九八一、九、二一）

### 註

- (1) Marcel Le Clère, *Le 6 février*, (Paris, 1967), p. 23.
- (2) 例えばベルステンは本文二三五頁の著書のうち実に三分の一の七六頁を初めに背景説明に当てている。Serge Bernstein (pres.) *Le 6 février 1934*, (Paris, 1975).
- (3) Alexander Werth, *France in Ferment*, (London, 1934), p. 9. むしろワースは一九三三年のヒトラー登場以後、「当時のフランスはデモクラシーの国、良識の国である



じよき誇りにしてゐた」云々を記して居る。 *ibid.*, p. 28.

- (4) *Chambre des députés, 1515, législature; session de 1934, Rapport fait au nom de la Commission d'enquête chargée de rechercher les causes et les origines des événements du 6 février 1934 et jours suivants, ainsi que toutes les responsabilités encourues.* 11 Tomes (Nos 3383 à 3393) plus 3 Tomes d'annexes. 国立図書館の整理ナンバ―は 4° Lb57, 19181 (1-4). 以上 'Rapport' と略記し、巻数と頁数を付記する。委員会の構成は初巻に詳しいが、全党からの四四名の委員からなり、二月二四日から七月四日まで計六五回開かれ一八七名の証人を呼んだ。最後の結論をまとめる段階で保守派一五委員が結論に同意せず辞職したがボヌヴェー委員長(保守派のフランダン派)は残留した。 (*ibid.*, 3383, pp. 7, 11, 13). 他に重要度において前者に劣るが人権同盟の独自の調査にもとづく報告がある。 *Les Cahiers des Droits de l'Homme*, 10-20 octobre 1934, "Le 6 février (Après enquête)" (以下 'Cahiers, 1934' と略記。ページ数は通巻)。

- (5) 不十分ながら事件を論じているものとしては、木下半治『フランス・ナショナリズム史(三)』図書刊行会、一九七六年、第五章、第一節。平瀬徹也『フランス人民戦線をめぐる諸問題』第二章(山本桂一編『フランス第三共和政の研究』所収、有信堂、一九六六年)。同『フランス人民戦線』近藤出版社、一九七四年、第一章、第二節。

- (9) スタヴィスキの経歴については以下を参照。 Werth, *op. cit.*, pp. 81-85, Le Clère, *op. cit.*, pp. 28-36, Maurice Chavardès, *Le 6 février 1934*, (Paris, 1966), pp. 21-25. かれが帰化外人でしかもユダヤ系であったことが右翼の宣伝に好都合であったし、またかれらの反感をよそる所以でもあった。

- (7) すでに三三年初めから弱少紙数紙が事件をかきつけて問題にしてゐたが、注目をひくに至らなかつた。 Le Clère, *op. cit.*, pp. 55-57.

- (8) Werth, *op. cit.*, pp. 87, 227-28, Chavardès, *op. cit.*, p. 22.

- (6) Werth, *op. cit.*, p. 90. まもなく『アノー・ド・パリ』紙でも右翼代議士ド・ケリリスが同じ示唆をくりかえした。

- Le Clère, *op. cit.*, p. 91. じつちにはフランスの大臣は一日に何百通の手紙に署名するのであり、そこに特別の意味を見出るのは困難である。 Werth, *op. cit.*, p. 322.

- (9) Werth, *op. cit.*, p. 94. シャバルデスも同意見。 Chavardès, *op. cit.*, p. 39.

- (11) シャバルデスとルクレールははっきり自殺説を採っている。前者はアルレット・スタヴィスキが彼女あての夫の最後の手紙の公開をあくまで拒んだ——公開こそ政府の自殺説への強い反論となつたはずであるのに——一点に自殺説の一つの根拠を置つて居る。 Maurice Chavardès, *Une Campagne de presse: la droite française et le 6 février 1934*, (Paris,

- 1970), p. 101. (以下、Chavardès, *Campagne* と略記。これに対しかれの前著は Chavardès, *Le 6 février* や略記。)これに対し、ルクレールは捜査隊が国家警察警視、シャモニー署刑事、憲兵などの数人の混成チームで相互に面識すらなかった事実を重視する。射殺を目的とするには不適當なチームであったといえる。Le Clère, *op. cit.*, pp. 68-71. ワースは自殺説をとっているが、警察は一週間というものの散歩中のスタヴィスキーを逮捕する機会を活用しなかったのであり、包囲による精神的圧迫で自殺に追いこんだのが真相と判断する。Werth, *op. cit.*, pp. 98-99. 他殺説は乏しいが、元共産党幹部ティモンは自らの体験からか警察による「虐殺」を相変らぬ信じている。Charles Tillon, *On chantait rouge*, (Paris, 1977), p. 178.
- (12) 二月六日以前の諸デモの日付、参加団体、場所、人数などの一覧表と被害の一覧表は下院調査委員会の報告を見よ。Rapport, 3384, p. 11, p. 18. それによると参加者数は一日に二千名から最大四千名である。
- (13) キアップの右翼デモに対する手ぬるい扱いについては、当時から人権同盟の調査や下院調査委の委員長ボヌヴェーの著作などが指摘しており、その後の研究でも常識とされている。Cahiers, 1934, p. 627, Laurent Bonnevay, *Les Journées sanglantes de février 1934*, (Paris, 1935), p. 55, Chavardès, *Le 6 février*, pp. 61-68, Werth, *op. cit.*, pp. 100-101. これに対し研究者では、ルクレールだけが「何人かの歴史家たちの主張に反して警察は特別に優しくはなかった」としている。Le Clère, *op. cit.*, p. 77. 現場での第一線警官の行動は必ずしも優しくなかったであろうが、逮捕者が翌日までに釈放されたことはキアップの基本的姿勢の反映であろう。下院調査委は両論を併記して断定を避けている。Rapport, 3384, pp. 22-24.
- (14) Werth, *op. cit.*, pp. 102-07, Berstein, *op. cit.*, p. 92, Le Clère, *op. cit.*, pp. 75-76, 85, 222. ルクレールは議員の事件関与が明らかだったこと、司法の明白な怠慢の二点でこの要求は「十分正当化されるかに見える」としている。ibid., p. 78.
- (15) Chavardès, *Le 6 février*, p. 117.
- (16) この夜の騒擾については、ibid., pp. 116-120, Werth, *op. cit.*, pp. 115-16, Le Clère, *op. cit.*, pp. 86-88, Cahiers, 1934, p. 624, Rapport, 3384, p. 5.
- (17) Chavardès, *Le 6 février*, p. 120. この寛容さが上からの命令によるもの第一線警察官(ただし組合加盟者)四名の証言については Cahiers, 1934, p. 626.
- (18) Berstein, *op. cit.*, pp. 115-18, Chavardès, *campagne*, pp. 46-47, Werth, *op. cit.*, p. 121.
- (19) 右翼の作家イマンも「国民は最初はかれら(新内閣——引用者)に特別な敵意を有しなかった。かれの最悪の政敵もタテディエ個人を正直で率直な在郷軍人と評価していった」と記している。Georges Imann, *La Journée du 6*

- février*, (Paris, 1934), p. 42. 一般紙も最初から敵対的ではなく新内閣の実績待ちの態度であった。Le Clère, *op. cit.*, pp. 94-95. パリの一般紙が本来きわめて保守的右翼的であることは周知のところである。
- (20) Berstein, *op. cit.*, p. 131. なおプレサールの地位はセーヌ県(パリ)初級審検事 Procureur de la République であるが、後述するようにプランス・セーヌ県検事局金融犯罪課長の上司であったとされているので誤解を与えないように上記のように意識した。識者の御教示がいただければ幸いです。
- (21) 上演題目は何か月も前に決定されるのであり、フアープルに特定政権批判の意図はなかったとする右翼のシエローの弁護論がある。Gaston Chéreau, *Concorde! le 6 février 1934*, (Paris, 1934), p. 59.
- (22) ルクレールは政界人に対してキアアップが有した三つの切札——かれが強もてした理由——として、かれを解任することの困難(無任期性)、その組織の強固な構造と、全重要人物に関する調査記録(逸脱した行動や不用意な発言、いかがわしい報酬などの)の独占を挙げつゝ Le Clère, *op. cit.*, p. 27.
- (23) Philippe Henriot, *Le 6 février*, (Paris, 1934), pp. 113, 116, Chéreau, *op. cit.*, pp. 46-47. ただし、両者とも叙述に誇張が感ぜられる。
- (24) *Rapport*, 3387, pp. 11, 46-50, Le Clère, *op. cit.*, pp. 107, 118, 148, Berstein, *op. cit.*, pp. 123, 132-33.
- (25) Henriot, *op. cit.*, p. 99, Imann, *op. cit.*, pp. 43, 46, Chéreau, *op. cit.*, pp. 27, 74-75, 人権同盟のよう解釈しつゝ Cahiers, 1934, p. 628. 管見の限りでは政治的意図に否定的なのはルクレールだけである。Le Clère, *op. cit.*, p. 109. 調査委は社会党とダラディエの間に取引きはなかったとだけ多数決で判定した。Rapport, 3385, p. 157.
- (26) ちなみに、今日見られる横断歩道はキアアップの採用になるもので、これによりパリの交通死者は一九二九年から三三年の間に三〇%減少したという。Werth, *op. cit.*, pp. 127-28.
- (27) *Rapport*, 3385, pp. 86-87, 95-96.
- (28) 報告全文と補足覚書は *ibid.*, 3385, pp. 68-76.
- (29) *Ibid.*, 3385, p. 86. ただしダラディエは、口頭でキア報告の概略を聞いただけでとった準備行動だと弁解している。
- (30) 右翼はキアアップ解任を「左翼独裁」をめぢすフロ内相(元社会党员)の働きかけによると見る。すなわちフロを陰謀の黒幕視する。Henriot, *op. cit.*, pp. 92-95, 100, Imann, *op. cit.*, pp. 43-44, 77-78, 113. この時期、右翼保守派は意図的にか本心からか急進党中心の独裁の危険性を強調する。財界人では鉄鋼委員会会長ト・ウマンデルが同じ恐怖を抱いていた。Jean-Noël Jeanneney, *François de Wendel en république—l'argent et le pouvoir 1914-1940*, (Paris,

1976), p. 490.

(31) 当日の議場内の状況についてはベルステンがもつとも詳しく院内外の反政府派の協力ぶりを伝える。Bernstein, *op. cit.*, pp. 190-96. 他に以下を参照。Bonnevay, *op. cit.*, pp. 159-163, Werth, *op. cit.*, pp. 147-151, Le Clère, *op. cit.*, pp. 137-142, Chavardès, *Le 6 février*, pp. 194-204, Chéreau, *op. cit.*, pp. 95-102, Henriot, *op. cit.*, pp. 137-158. 最後の右翼の二著作を除けば院内外の反政府派の協力の指摘はどれも共通している。

(32) Werth, *op. cit.*, p. 150.

(33) というよりも院内外の事態の進行の時間的一致が計算されていたというべきである。右翼の議事妨害の激しさの背後には、ダラディエが政府への代表質問者の人数の制限を突然提案したため下院議事が予想より早く終了する可能性が強まったこと、広場の騒擾や後述のパリ市会議員の下院侵入と院内議事との時間的一致が危うくかけたことへの右翼の焦りがあった。註(31)の諸書、とりわけBernstein, *op. cit.*, pp. 192-93. を参照。

(34) Le Clère, *op. cit.*, p. 145. なお、下院調査委も結論しているように、「二月六日午後四時から翌朝二時の間にコンコルド広場で起ったことを正確確実に決定することはきわめて困難である」(*Rapport*, 3386, p. 1)。本稿もこの報告と諸研究により不十分ながら事態を再現してみた。なお、当夜の示威への参加諸団体の名称、集合場所、時間の一覧表は

*ibid.*, 3385, p. 144. これらが全体としてブルボン宮を包囲する形となる事実の警察による指摘(委員会も同意見)は、*ibid.*, 3385, pp. 143-44.

(35) 右翼のシエローだけがこの事実を否定している。Chéreau, *op. cit.*, p. 133. 調査委は明快な断定はしていないが、傷口からみればそれ以外考えられないと肯定的である。*Rapport*, 3390, p. 8.

(36) Werth, *op. cit.*, p. 151. 「阻止線が崩壊して議会が侵入されるのではないかと恐れられた瞬間があった」とエリオは回想している。Edouard Henriot, *Jadis II, D'une guerre à l'autre 1914-1936*, (Paris, 1952), p. 376.

(37) Chavardès, *Le 6 février*, p. 204.

(38) Le Clère, *op. cit.*, p. 159. 未だに流布している俗説ではエリオが「リヨン市長にとってローヌ河以外の流れで一生を閉じるとは何たる恥辱」と慨嘆したことになるが(Michel Soulié, *La Vie politique d'Edouard Henriot*, (Paris, 1962.) p. 437.) 抗議であったとするルクレールの方が次のエリオの回想録の記述により合致する。「私はリヨン市長がローヌ河以外の流れで一生を閉じるといふ考えに恥辱を感じた。私はあえてそう口答えした……。勇氣ある一人のコミュニストが外務省を守る警官のバリケードに私がかたどりの助けをした。ある火の十字団員はその同志たちに攻撃を中止せよと命令した。」(Henriot, *op. cit.*, pp. 376-77.) なお、当夜の警備陣は警官の他に、遊撃衛兵、共和国衛兵、

憲兵などの混成チームであったので、今後一括して警備陣  
(側)と呼ぶ。

(39) Chavardès, *Le 6 février*, p. 208. なお、当日のミニ  
フェスタンを価値判断を含む「暴徒」という言葉で表現する  
のは必ずしも適当ではないが、広場ではすでに規律ある「デ  
モ隊」ではなく、かといって多数の見物人を含む「群衆」で  
も適当でないので、便宜的ながら暴徒と呼ぶことにする。文  
脈に応じてカッコをつける時もある。

(40) 自身南仏出身者である作家アンドレ・シャンソンはこの  
段階ではマルセイユやコルシカの前科者、ならず者が目立っ  
たと確言した。キアップとのつながりを感じさせる事実では  
ある。 *ibid* p. 213.

(41) 「この(コンコルド橋上の警備人員の——引用者)不足  
はほとんど誰もが認めている」。( *Rapport*, 3386, p. 20 ) な  
お増援を含めた詳しい数字は *ibid.*, 3386, pp. 3-5. 当  
夜、警視庁では四千名の警官がいに出勤を命ぜられること  
なく無為に待機しており、新任総監ボヌフワシブールはそ  
の事実を知らされていなかった。 Chavardès, *Le 6 février*,  
pp. 210, 233. 配備の誤り(策謀でないとしても)は明らか  
である。ただし、右翼のシェローは逆に嚴重すぎる警戒がデ  
モ隊に対する「挑発に変じた」と反対の評価を下している。  
Chéreau, *op. cit.*, p. 90.

(42) *Rapport*, 3386, p. 7, *Cahiers*, 1934, pp. 635, 637, 最初  
の銃声が暴徒の位置するクール・ラ・レンヌ(広場のサーヌ

河に面した岸)から聞かれた点は右翼も頭から否定はしな  
い。そこでシェローは平服の警官は各所に配置されていた  
から(これは事実。 *Rapport*, 3384, p. 20.) 「暴徒」側の発  
砲とは断定できないと苦しい言訳をしている。 Chéreau, *op.*  
*cit.*, pp. 116-17. アンリオもクール・ラ・レンヌ近辺の  
「暴徒」とは別の怪しい一団から最初の銃声が聞かれたとの  
見聞を紹介している。 Henriot, *op. cit.*, pp. 177-78.

(43) *Rapport*, 3386, pp. 7-8, *Cahiers*, 1934, pp. 635-36.  
ただし、アンリオは調査委の言う「パニック」を否定し、警  
備側は冷静に発砲したとする。 Henriot, *op. cit.*, p. 186.

(44) *Rapport*, 3386, pp. 12-13, 3387, p. 74, Bonnevey, *op.*  
*cit.*, p. 108. 何れにせよ相当の数である。

(45) かれらが下院への前進を断念したのは通常、警備側の説  
得に応じたためとされるが、( *Rapport*, 3386, p. 13, Le  
Clère, *op. cit.*, p. 150. など) それもあつたにせよ、もとも  
と下院無視はUNCの既定方針だったとのウェーバー説がよ  
り説得力に富む(Eugen Weber, *Action Française*, (Stan-  
ford, 1962), p. 337.) 後述するようにルミック会長が大統  
領への請願を念頭においていたと考えれば、その方が非政治  
的に映り好都合であろう。UNCは本心か否か別として非政  
治性を売物にしていた。

(46) *Rapport*, 3387, pp. 81-82.

(47) *Ibid.*, 3387, p. 102.

(48) *Ibid.*, 3387, pp. 82-83.

(49) *Ibid.*, 3387, p. 83. しかし、「デモを導いたのは我々ではなく警察である」(*ibid.*, 3387, p. 84.)とも述べ、要するにあやふやな答えになった。

(50) *Ibid.*, 3387, p. 6. この二理由が両立しないと必ずしも言えないが、あさましい結論は在郷軍人諸団体に對する議員たちの遠慮を物語っているように思われる。議員たちの発言にもUNCを他の諸リーグと区別する配慮が目立つ。

(51) *Ibid.*, 3387, pp. 82-86, 94-97, 解散場所としては広いコンコルド広場が最適であったとも主張された *ibid.*, 3387, p. 98.

(52) *Ibid.*, 3386, pp. 13-14, Bonnevey, *op. cit.*, pp. 117-135, Le Clère, *op. cit.*, pp. 154-57, など。その他の諸著作も右翼を除けば相違はほとんどない。

(53) Werth, *op. cit.*, p. 160. 周辺部の発砲については *Rapport.*, 3383, p. 114.

(54) *Rapport.*, 3389, pp. 13-15, Le Clère, *op. cit.*, pp. 183-85 などいくつかの著作に氏名、所属党派などの一覧表がある。なお、民間人六五五名、警備陣七八〇名、計一四三五名の確認された負傷者数は、*Rapport.*, 3389, pp. 12-13. が根拠となっている。

(55) *Ibid.*, 3387, pp. 135-140, *Cahiers*, 1934, p. 642-43. ルクレールはデモ隊リーダーにラ・ロックが与えた電話による指令が方向転換の決定因であったとする Le Clère, *op. cit.*, pp. 158-59, 229. しかし、緊迫したやりとりが警備リー

ダーとデモ隊リーダーの間に交わされたことも事実であり、警備リーダーの勇気と沈着は認められている。なお、個人として多くの火の十字団員がコンコルド広場にまわり攻撃に参加した事実は負傷者一二二名という数字にも明らかであり、(*Rapport.*, 3387, p. 146.) 間もなく団を脱退する幹部シムブームも確言している。 Paul Chopine, *Six ans chez les Croix de feu*, (Paris, 1935), pp. 115-16.

(56) *Ibid.*, p. 117. シムブームは「ラ・ロックは準備不足であり、事態の急速な展開に不意を打たれたのだ」と酷評している。 *ibid.*, p. 107. 逆にラ・ロックは第二次大戦中ドイツの収容所にダラディエと共に抑留されている間しばしば話し合い、火の十字団は二月六日夜示威のため街頭に出たのであって騒擾を起すためではなかったこと、アクシオン・フランセーズらの諸リーグはこの事実を裏切りとみなし決して許さなかったと語った。 *Archives Daladier*, 1 DA 5, Dr 5 cité par Berstein, *op. cit.*, p. 175. ラ・ロックが二月六日夜事態の展開に不意を打たれたのは事実としても——他の多くの指導者たちも同様だった——、二月六日夜の穏和性はこの時期のかれと火の十字団の行動の中で例外ではないのは確かである。

(57) *Rapport.*, 3388, pp. 30, 35-36. *Cahiers*, 1934, p. 640, Bonnevey, *op. cit.*, pp. 148-49.

(58) *Rapport.*, 3388, pp. 37-39, 46, Bonnevey, *op. cit.*, pp. 150-51. 予定通りの出発であることが明らかである。

- (65) ダラビエは辞職要求があった事実を否定してはいるが、委員会は他のすべての証言にも必ずしも肯定してはいる。 *Rapport*, 3388, p. 56.
- (66) *Ibid.*, 3387, pp. 161—63, *Cahiers*, 1934, p. 638.
- (67) Bernstein, *op. cit.*, p. 177. フリマン・ホースマン・エトナ「このスコロガンはかれらを極右派モ隊との客観的共犯として歴史的状況に導いた」としてはいる。 Plumyène (J.) et Lasserre (R.), *Les Fascismes français 1923-1963*, (Paris, 1963), p. 73. 彼の *Bonnevay*, *op. cit.*, p. 209, Le Clère, *op. cit.*, p. 163.
- (68) Alain Deniel, *Bucard et le francisme*, (Paris, 1979), pp. 82-84, 調査委の参加団体名一覽表によれば参加。 *Rapport*, 3385, p. 5. したがって同団はペリド三〇〇名の団員、全国に約一五〇〇名を数えしめる (*ibid.*, 3385, p. 6) 独自のトキは困難である。
- (69) Le Clère, *op. cit.*, pp. 163-65. ただし、人権同盟の報告は地方(ルーアンのランスマ、ウォーシヨ、カルバガス、ロフ、ブリエ、ノオント)からのリーグ員の上京を伝えている。人数は不明。 *Cahiers*, 1934, p. 633.
- (70) Chéreau, *op. cit.*, p. 22.
- (71) Henriot, *op. cit.*, pp. 173-74. 似た数字は Le Clère, *op. cit.*, p. 227.
- (72) Henriot, *op. cit.*, avant-propos, X.
- (73) *Rapport*, 3391, pp. 1-8, Bonnevay, *op. cit.*, pp. 184-87, Chavardès, *Le 6 février*, pp. 259-264. 必ず。予審開始に材料不足とは必ずしも言えず、必ずしも検察の発言としてが奇異に映る。先の見えた内閣には官僚も冷淡だったというのが真相である。
- (74) *Rapport*, 3391, pp. 4-11, Bonnevay, *op. cit.*, pp. 195-97.
- (75) Le Clère, *op. cit.*, pp. 174—79, Chavardès, *Le 6 février*, pp. 271-77, Bernstein, *op. cit.*, pp. 204—09.
- (76) Henriot, *op. cit.*, p. 213.
- (77) Werth, *op. cit.*, p. 168. トースは新田のダラビエの精神状態の正確な記述を数々述べている。
- (78) *Ibid.*, p. 170, Bonnevay, *op. cit.*, p. 243. 右翼のアンリホがペリド「練習」について述べている。 Henriot, *op. cit.*, p. 213.
- (79) Werth, *op. cit.*, p. 186.
- (80) Philippe Bauchard, Léon Blum—*Le pouvoir pour quoi faire?*, (Paris, 1976), p. 101, Bernard Georges et Denise Tintant, *Léon Jouhaux dans le mouvement syndical français*, (Paris, 1979), p. 96.
- (81) フランス事件については主に次を参照。 Werth, *op. cit.*, pp. 200-215, Le Clère, *op. cit.*, pp. 216-19.
- (82) *Ibid.*, pp. 213—19, Werth, *op. cit.*, pp. 206-09. 彼らもスターリンキーと多くの関りのあった上級官僚の名を数々述べ自殺と自殺未遂を述べている。 *ibid.*, pp. 214-15.

- (77) Henriot, *op. cit.*, ch. IX, Chéreau, *op. cit.*, chs. I, VII et XII. 例外として右翼の中では「むしろ体制変更を目指すのではなく」とする親フアンシヨのトマンは「二月六日ブルボン宮を行進したパリ市民たちは議会を破壊しようとするのではなく」と公然と書こうとした。Imann, *op. cit.*, pp. 103, 114-15.
- (78) Léon Blum, *Oeuvres de Léon Blum*, IV-1 (1934-1937), (Paris, 1964), p. 9.
- (79) *Rapport*, 3383, p. 54. 上記調査委員オスマウハーの無難の見解である。Bonnevay, *op. cit.*, pp. 22, 74.
- (80) *Cahiers*, 1934, pp. 620, 654.
- (81) Chavardès, *Le 6 février*, p. 249. 有名な「木下平治」前掲書 一—八頁。
- (82) Le Clère, *op. cit.*, pp. 225-29.
- (83) *Ibid.*, p. 226.
- (84) *Rapport*, 3384, pp. 12-17, 3385, pp. 135-39, *Cahiers*, 1934, p. 624.
- (85) Le Clère, *op. cit.*, p. 229.
- (86) Werth, *op. cit.*, pp. 161-62. 陰謀説をとるルクレールも事件の直接因として、政府の予測の誤り（示威者数を警視庁は初め七—八千名と予想。実際には約四万名）、警備陣の組織的不備（混成チームのためリーダーは部下を知らず、部下も上官を知らず）、物質的手段の欠如（催涙ガス弾不使用、鉄兜不着用など）の三点を挙げる。Le Clère, *op. cit.*, pp. 183-190. 調査委員も警備の不備が様々な側面からとり挙げられた。*Rapport*, 3383, p. 114, 3386, pp. 17-24.
- (87) René Rémond, *La Droite en France*, Tome I (1815-1940), 3e ed. (Paris, 1968), pp. 216—17. だが同じ見解を Dieter Wolf, *Doriot—du communisme à la collaboration*, (Paris, 1969), pp. 102—05. 邦訳『トランスフアンシヨの生成』一〇七—〇九頁。
- (88) Plumière et Lasiera, *op. cit.*, pp. 67, 74, 77. したがって本書は陰謀ニクよりも事件の伝統的非フアンシヨ的性格の強調に主眼がある。
- (89) Berstein, *op. cit.*, pp. 86, 153, 250.
- (90) Weber, *op. cit.*, pp. 333, 338.
- (91) Imann, *op. cit.*, p. 82, Henriot, *op. cit.*, p. 171. トンリオによればステッキの先に剃刀をつけていたのを「ならず者」でしかなく「それらは孤立した事実である。」*ibid.*, pp. 171-72.
- (92) 左翼の見物人ダニエル・ゲランが警官にうち倒されをみわたされたのは一例である。Chavardès, *Le 6 février*, p. 257. 調査委員も「警備側が不必要な乱暴を發揮したことは不幸にも確実である」と認める。*Rapport*, 3386, p. 59, 3383, p. 36. なお、六日夜警備側の発射した銃弾は五三九発で、銃弾による民間人死傷者は七一（死者一四、負傷五七）。銃弾数のわりに死傷者が少いのは大部分が空に向けられたためとす。*ibid.*, 3386, p. 59. 負傷者八一とす。3389,



- p. 18.
- (63) Chéreau, *op. cit.*, pp. 201-04. また、偶々UN Cデモの先頭近くに行ったポピランの回想を参照。Caude Popelin, *Arènes politiques*, (Paris, 1974), pp. 18-19.
- (64) *ibid.* *Rapport*, 3385, pp. 149, 146. 諸研究の出典もすべてこの報告 (pp. 146-49) にある。
- (65) Weber, *op. cit.*, pp. 333-34, 338. 下院調査委がこの「陰謀」をとり挙げていないのは、存在を知らなかったためか、その空想性のためか、何れかであろう。ともあれ、アクシオン・フランセーズが共和政に対し、「永久的陰謀」状態にあることは天下周知のところである。
- (66) *Ibid.*, pp. 334-35.
- (67) *Rapport*, 3385, pp. 150-54. 市会議員のデ・イスナールは政府の交代は「目的の一つ」であったと答えているが (*ibid.*, p. 152) 他は表現こそ様々だが一致している。
- (68) *Cahiers*, 1934, p. 641. 愛国青年団指導者とともに市会議員のテタンシエとデ・イスナールはこのビラを知らぬと証言したが (*Rapport*, 3388, p. 29.) 人権同盟が述べているように「当然予想されると言わば」ことであり、かれらが関知していなかったとは到底考えられない。
- (69) *Rapport*, 3385, pp. 113-114.
- (70) *Ibid.*, 3388, p. 58, *Cahiers*, 1934, p. 652. 人権同盟は「今だから言える」との表現が計画の秘密性を示すことなどからこれを重視する。
- (101) *Rapport*, 3383, p. 58, 3388, p. 38.
- (102) 市会が行動に出た背後には次の二つの特別の理由があった。第一に警視庁に関する行政監察——モッセ報告としてまとめられる——が進行し、警視庁の再組織を進言する可能性があったこと。第二にすでにシヨータン首相の下で警察機構改革についての法案が準備されていたこと。ともにパリ警視庁のフランス警察行政における特別の地位を変更する可能性が強く、パリの特別の地位に愛着をもつ市会としては黙視できなかつた。すでに一月初めから市会は動揺し始め、この点の検討のための市会招集には左翼、極左翼の市議員も賛成していた。 *Rapport*, 3388, pp. 32-35, 59. 急進党内閣が退陣すれば少くともこの危険は遠のくことになる。
- (103) Plumyène et Lasiera, *op. cit.*, pp. 80-81.
- (104) 今日では火の十字団のファッシ的性格を否定する著作が支配的である。古くは Rémond, *op. cit.*, pp. 208-224, 新しいものでは Henri Noguères, *La Vie quotidienne en France au temps du front populaire 1935-1938*, (Paris, 1977), p. 71. とくに後者は諸リーグ団員と街頭で日常的に対決していた元社会党青年活動家の筆になるものだけに説得力がある。